

家族と遺影撮影

子や孫に囲まれた和やかな雰囲気
で、プロのカメラマンに遺影を撮っ
てもらう人が増えているという。長
く人々の記憶に残る写真だからこ
そ、家族と一緒に、納得のいく笑顔
の一枚を選ぶ。(渋谷聖都子)

穏やかな秋の日差しが降
り注ぐ兵庫県姫路市内の小
道で、長男陸玖くん(2)と
シャボン玉遊びをするの
は、同市の会社員坪田伸一
さん(36)、裕子さん(36)夫
妻。かたわらで、裕子さん
の両親、林正美さん(68)と
律子さん(6)が、にこやかに
見守っている。

代わる代わる陸玖くんを
抱き上げたり、ほおずりし
たりする一家の姿を、近く
でフォトスタジオを経営す
る石田直之さん(37)のレン
ズが追う。

正装してカメラの前に並
ぶのではなく、日常の何気
ない表情を切り取る石田さ
んの「カジュアルフォト」に
魅せられ、坪田さんたちは
半年(ごっこ)で家族の記
録を残してきたが、両親を
誘ったのは初めてだった。
「孫たちと楽しんでる
うちに自然とこぼれた笑顔
が、たまたま最期の一枚に
なるなら、こんなステキな

最期の笑顔 自分らしく

ことはないと律子さん。
正美さんも「お参りしてく
れた人に元気だった頃を思
い出してもらえる写真を残
す、いい機会かも」と、夫
婦のツーショットや1人の
撮影に、気軽に臨んだ。

この日は、正美さんが1
枚を遺影用に選んだ。表情
に温かさがにじみ出してい
る。裕子さんも「とつても
父らしい顔。みんなで元気
に写真を撮れる幸せもかみ
しめました」とスタジオを
後にした。

*
神戸市西区の主婦渡辺篤
子さん(51)は昨夏、50歳を
迎えたのを機に、夫の浩之



娘一家が見守るなか、2人
だけの撮影にも臨んだ林さ
な夫妻。いつもの柔らかな
表情が切り取られていく

輝いている「今」残したい

さん(49)とともに、初めて
石田さんを訪ねた。

その2か月前、篤子さん
は82歳の父を見送った。脳
梗塞で倒れてからの3年
間、「笑顔もななく、かつて
の父の顔を忘れてしまうほ
ど」。葬儀の直前、スツ
姿のスナップ写真を見つけ
出して遺影にしたが、仏壇

にあるその写真を見るた
び、「人生の集大成ともい
える一枚を、スナップ写真
で間に合わせてよかったの
か」との思いがよぎった。

死の瞬間、心おきなく人
生に暮が下ろせるよう、
「今、一番いい笑顔を家族
に残しておきたい」。考え
抜いた撮影だった。

腕をからめたり、見つめ
合ったり、恋人時代に戻っ
たような気持ちで、スタジ
オで数時間を過ごした。で
きあがった写真を見て、「私
って、こんなにいい表情し
ていたの」と、驚いた。「主
人が横にいてくれたから」。
感謝の気持ちがわき上がっ
た。

今夏は、長女の朱淑(あき)さん
(19)も連れて来た。年に1
回家族写真を撮り、遺影も
その都度、更新するつもり
だ。篤子さんは「遺影を残す
ことは決してマイナスでは
なく、輝いている自分を残
すプラスの行為。家族のき

ずなほ深まる気がす
る」と話す。

*
石田さん自身も、昨年1
月の父主計さんの死をきつ
かけに、遺影への思いを深
めた。

亡くなる半年ほど前、体
調のよさそうだった日に
「ええ顔してるし、写真で
も撮ってみる？」と、たま
たまシャッターを押した1
枚が告別式の祭壇に飾られ
た。厳格だった父が少しだ
けほほ笑んだ、見慣れた表
情が、そこにはあった。

葬儀が迫り、あたふたと
写真を探し、ずいぶん昔の
顔になったり、集合写真を
引き伸ばしてピンぼけにな
ったり、ほろ苦い体験を持
つ人も少なくないはず。「死
ぬための写真じゃなくて、
今を生きる、その人らしさ
があふれている写真に」。遺
影のイメージを変えた、
それが石田さんの願いだ。



「陸玖くん、こっちはよ」。坪田伸一さん(奥右端)、裕子さん(そ
の隣)とともに、家族のリラックスした表情を引き出すカメラマンの
石田直之さん(奥左から2人目)。(兵庫県姫路市) ●奥村宗洋撮影



渡辺篤子さんお気に入りの、現
時点での遺影用写真。夫とのツ
ーショット写真から選んだ